

# ヨブ記42章7節<sup>1</sup>に 関する一考察<sup>2</sup>

A Study on Job 42 : 7

平野 満義  
Mitsuyoshi Hirano

キーワード

ヨブ記42章7節、ヨブ、ヨブの3人の友人、ヤハウエ、אֱלֹהִים、נְכוֹנָה

KEY WORDS

Job 42:7, Job, Job's three friends, the LORD, אֱלֹהִים, נְכוֹנָה

要旨

ヨブ記42章7節は、ヨブと3人の友人たちとの間の論争に関するヤハウエの裁定だと考えられる。そこでヤハウエが褒めたのは、ヨブだった。

だが、ヤハウエを擁護していたのは、むしろ友人たちの方だった。これに対してヨブは、ヤハウエに論争を持ちかけようとさえした。だのに何故、ヤハウエはヨブの方を褒めたのだろうか。

本稿では、BHS本文と、各種の翻訳聖書とを照合する中から、אֱלֹהִיםとנְכוֹנָהという2つのキーワードについて特に注目していく。そして、この2つのキーワードの考察を通じて、ヨブ記42章7節の新たな理解と解釈を試みる。

その結果として、これら2つのキーワードにより、従来の一般的な理解の見直しが提示される。このことはまた、ヤハウエと人とのあるべき関係性が、律法や教義によって語り尽くされるようなものでなく、よりダイナミックで深い人格的な交わりであったことを示しているのではないだろうか。

## SUMMARY

Job 42:7 is understood to be Yahweh's decision concerning the dispute between Job and his three friends. In this passage Yahweh praises Job, not his friends. Those who defended Yahweh in the dispute were the friends, but they were blamed later by Yahweh. Job, on the contrary, even tried to argue against Yahweh. Why, then, did Yahweh praise him?

Usual opinions so far do not appear to be able to explain sufficiently this issue in the Book of Job. In this article the present writer tries to offer a new understanding for this issue through a careful comparison of BHS text and various terms in biblical translations. The writer observes some important characteristics of two key words, אֱלֹהִים and נִכְוֶנָה. He concludes that the passage in question suggests a desirable dynamic personal relationship between Yahweh and human beings.

## 序 論

ヨブ記の理解を図る上で無視できないのが、韻文で記されたヨブと3人の友人たちとの対話部分の内容である。ここでヨブは3人の友人たちから自らの罪を認めるよう促されるが、彼はあくまでこれを拒む。それどころか後には、自らの潔白を主張するため、ヤハウエを相手にした論争さえ決意してみせる。

ところで、ヨブと友人たちのこの論争へのヤハウエの裁定と考えられるのが42章7節である。だが意外なことにヤハウエはここで、ヤハウエを擁護していたかに見えるヨブの友人たちに向けて怒りを示す一方、「お前たちは、わたしについてわたしの僕ヨブのように正しく語らなかったからだ<sup>3</sup>」と、間接的な表現ながら、自らに論争を挑もうとしたヨブの方を賞賛している。これは一体何故なのか。ヨブの何をヤハウエは褒めたのであろうか。

この問いに対して、本稿では当該箇所的位置付けや、各種翻訳聖書の解釈、従来の諸研究を整理、検証する。その上で、ヘブライ語聖書における鍵語の使用例の再検討などを通じて、その理解を図ろうとするものである。

## 第1章 ヨブ記の概要と42章7節の位置付け、問題点と従来解釈

### 1.1. ヨブ記の構造と特徴

ヨブ記は、散文で書かれた始まり部分（1～2章）と終わり部分（42章7～17節）が枠物語をなし、韻文の中央部分を挟み込む構造になっている。このため戯曲等の構成になぞらえ、始まり部分を「序曲」、終わり部分を「終曲」と称し、韻文の本体部分との3部構成として整理する場合が少なくない<sup>4</sup>。

「序曲」では、「利益もないのに神を敬うでしょうか」（1章9節）と、サタンがヨブの信仰に疑いを差し挟んだのを受けて、ヤハウエがヨブをサタンの手に委ねる事の発端と、そうして引き起こされた2度の災いにも、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」（1章21節）、「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか」（2章10節）と、サタンの主張を裏付けるような罪を犯すことがなかった、ヨブの当初の反応が記されている。

これに続く本体部分は、ヨブの独白（3章）に始まり、ヨブと3人の友人との討論（4～27章）、神の知恵の讃美（28章）、ヨブの独白（29～31章）、エリフの言葉（32～37章）、神の言葉とヨブの応答（38～41章、42章1～6節）等で構成されている。

また「終曲」には、「序曲」に対応する形で、ヨブに対するヤハウエの祝福の回復の顛末と、後日談とが記されている。

なおヨブ記のBHS本文は、「序曲」と「終曲」の表現が比較的平明なのに対し、韻文の本体部分にはテキストの乱れと思われる、意味の通らない箇所<sup>5</sup>がいくつか見られること、「ハパクス・レゴメノン（全聖書中1回しかでない単語）や、独特の言い回しが多<sup>6</sup>」いこと等から、ヘブライ語聖書39書の中でも、難解なものの1つに位置付けられている。

### 1.2. 成立時期と編集過程

ヨブ記については、基礎的な部分を中心に、未だに確定されていない要素が少なくない。

例えばその成立時期について、並木浩一は「ヨブ記の表現が第2、第3イザヤ（イザヤ書40章以下）の文言を利用していると思われるところから、今日の大方の研究者は捕囚以降のペルシア時代（前538～333年）のいずれの時期かに属する作品であると漠然と考えている<sup>7</sup>」と記しているが、その言い回しは、この問題が今も曖昧なままに残されている雰囲気をよく言い表している。

一方その編集過程についても諸説がある。大勢となっているのは、エゼキエル書

14章14節にノア、ダニエルと並び称される人物として見られるヨブへの言及を、古くから義人ヨブを主人公とする民間伝承が存在したことの裏付けと捉え、ヨブ記の枠物語である「序曲」と「終曲」はそれを元に行っているという考え方である。ただその場合にも、元の物語が比較的原型に忠実に用いられたのか<sup>8</sup>、あるいは、あくまでもヨブ記記者の材料になったに過ぎないのか<sup>9</sup>については、見解の分かれるところとなっている。

さらには、本体部分に限っても、争点は決して少なくない。今日、大方の研究者によってコンセンサスが得られていると考えられるのは、エリフの弁明（32～37章）が後代の加筆であるという点だが、これについてもやはり異論は見られる<sup>10</sup>。

### 1.3. 42章7節の構造上の位置

ヨブ記42章7節は、枠物語をなす「終曲」の冒頭部分に当たるのみならず、文学形式上も、韻文から散文への移行点に位置している。また、すでに見てきた編集過程の問題を念頭に置けば、当該部分は民間伝承との関連が想定され、本体部分との不連続性を考慮しなければならないとも言える<sup>11</sup>。

だが仮にこの説を採った場合でも、枠物語部分に一定の付加、修正がなされているというのが一般的な考え方であり、問題はそれがどのように行われたのかにある<sup>12</sup>。こうした中には、42章7～10節を、本体部分から「終曲」への移行をより効果的なものにするために加えられた短い継手と考えるロバート・ゴルディスの説<sup>13</sup>も含まれるが、仮にそうであれば、枠物語と本体部分との接合点に位置するこの箇所は、同時に両者の連続性を最もよく反映した部分であるとも考えられる<sup>14</sup>。

本稿ではこうした点を踏まえ、以後、編集過程の問題に深入りすることを避け、あくまでも今日伝えられている正典テキストとしてのヨブ記を対象に、共時的な視点に立って考察を進めていくことにしたい。

### 1.4. 42章7節のコンテキスト上の位置と問題

ヨブ記42章7節は、その直前まで展開されるヤハウエの語りとそれに対するヨブの応答に続いている。ヤハウエはここで、4～32章にわたって展開されてきたヨブと3人の友人との間の論争に裁定を下す。しかしながら、その内容は意外なものである。

ヨブと友人たちとの間の論争に話を戻すと、ヨブは友人たちから自らの罪を認めることを促されるが、あくまでもそれを拒み、挙げ句の果てには、自らの潔白を証明するため、ヤハウエとの論争をさえ決意してみせる。これはややもすれば、当初の段階でヨブが示していたヤハウエへの絶対的な信仰を棄て去ったようにも理解し得る成り

行きである。一方、一見する限りにおいて、友人たちの発言に、ヤハウエからの叱責を甘受しなければならないような傷は見当たらない。

しかしながらヤハウエは、前の対話においてヤハウエを擁護する立場にあったかに見える友人たちに怒りを示す一方で、38章2節～39章30節と40章2節～41章26節という2度にわたる語りを経て、自らのあり方に深い反省の意を示したばかりであるヨブについては、間接的な表現ながら賞賛しているように見える。そうした矛盾の焦点となるのが、42章7節<sup>15</sup>のヤハウエの言葉、「お前たちは、わたしについてわたしの僕ヨブのように正しく語らなかった」である。

一体ヨブは何を以てヤハウエに賞賛され、その友たちは何によってその叱責に甘んじなければならなかったと言うのだろうか。

### 1.5. 42章7節の従来解釈

この問題に関しては、38章2節および40章2節から始まるヤハウエの言葉と42章7節との矛盾を解決するために、従来の研究者が42章7節との関連箇所を文中のどこに見出してきたかという点について、近年Manfred Oemingが系統的な分類を試みている<sup>16</sup>。そこで本稿ではこの成果を下地に、本稿なりの視点も加えて、以下の5つのタイプに整理し直してみたい。

#### 1.5.1 応報論と結びつけた説

当該箇所の理解で最も定説に近いのは、因果応報的な神学思想の否定という見方である。

Josef Schreinerは、ヤハウエは応報論に縛られず、その点についてはヨブも正しく語ったと言う<sup>17</sup>。和田幹男も、「エリファズをはじめ友人たちが語ったのは因果応報の思想の神で、それは人間が考える神であって、まことの神そのものではないからである<sup>18</sup>」と、ほぼ同様の考えを示している。

この考えは、ヨブ記の物語の発端が、サタンの問いにあったことを思うと、それなりの説得力を持っているように思われる。ヨブ記本文が、サタンの問いに対する答えであるとすれば、因果応報を排除したところにこそ、ヨブとヤハウエとの、サタンに対する勝利がなければならぬはずだから、である。

しかし一方でこの説には、仮にヤハウエの怒りが因果応報の思想に向けられていたのだとすれば、42章10節以下で、ヨブに以前を上回る財産が与えられている点をどう評価すればよいのかという、決定的な難点が残る<sup>19</sup>。

### 1.5.2 「序曲」と結びつけた説

この説は、散文で書かれている「序曲」の1、2章と42章7節以降との対応関係を重視し、1章21節（「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」と、2章10節（「わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか」）をその関連箇所だと考える。

G. フォン・ラートは、「序曲」と「終曲」に対して、本体部分は完全に独立しているという考えから、この説を採っている<sup>20</sup>。J. C. L. ギブソンも、「ヨブの無罪宣告」<sup>21</sup>との関連で当該箇所を挙げる<sup>22</sup>。

ただこの説では、3人の友人たちの誤りが宙に浮いてしまうという難点がある<sup>23</sup>。

### 1.5.3 ヨブの改悛と結びつけた説

38章2節から、さらに40章2節からの2度にわたるヤハウエの言葉を受けて、ヨブは40章4～5節と42章2～6節でヤハウエに応え、42章6節では、「それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し／自分を退け、悔い改めます」と、明らかに改悛の意を表わしている。

Gustav Hölscherは、当該箇所の意味をこうした部分と結びつけて考え、ヤハウエの崇高な力と知恵の優越を認め、謙虚にその下へと屈服したヨブの物言いが、ヤハウエに賞賛されたのだと言う<sup>24</sup>。

しかし、ヨブの悔いによる神への回帰が結論だとすれば、エリファズら3人に対しても、ヨブと同様、ヤハウエとの直接的な関係において発言の機会が与えられてもよかつたはずである。しかし、そうはならなかった。すると、ヨブと3人の友人とに対するヤハウエの接し方には、その最初から違いがあったことになるが、この説では、そうした部分を説明し切れていないように思われる<sup>25</sup>。

### 1.5.4 ヨブの抗議と結びつけた説

この説は、応報論の否定を足場にしつつ、ヨブのヤハウエに対する抗議そのものは、ヤハウエに受け入れられたのだと考える。

例えばJürgen Ebachは、3人の友人が神の弁護を試みた段階で、彼らが神を超え、神への欺瞞に陥ったことを彼らの誤りだと考える一方、ヨブは嘆き訴え、反抗するままに、ヤハウエの僕であり続けた点を指摘する<sup>26</sup>。またギブソンは、「神は友人たちによる神の援護論よりも、神に対するヨブの攻撃の方を限りなく好んだ<sup>27</sup>」とも述べている。

しかし前者の理解では、ヨブの正しさについて、また後者のそれでは、友人たちの

誤りが何であったのかが不明瞭なままである。

こうした点について、さらに踏み込んだ考えを示しているのはU. Bergesである。Bergesは、1. 5. 3が根拠とする42章6節を、神は確かに全能だが正しくないという理解から、ヨブが神の話への拒絶を表明し、かつ「塵と灰の上で慰めを見つけ出します」と語ったのだと読み替える。つまり、ヨブは最後まで自らの抗議を貫き通したと考える<sup>28</sup>。

だがそれでは、友人たちのため、ヨブが他ならぬヤハウエへと執り成しの祈りをする後の展開との間に、辻褃の合わないものが残る。

### 1. 5. 5 ヨブ記本文を超越した解釈を求める説

これまで見てきた4つのタイプの説は、それぞれに違った意味付けを試みながらも、当該箇所との対応部分をヨブ記本文の中に見出そうとする点では共通した立場を採っている。これに対してこの説は、そうした本文中の対応関係を特定することなく、つまりはヨブ記本文の記述を超えた高見に、その解釈を求めようとする試みだと言える。例えば、私たちはこうした解釈を目にする。

「問題は、自分自身を正しいと主張する人間が神によって正しいと認められたということ、すなわちヨブがその弁論のそこかしこで言ったことが神に対して『正しかった』として、後で神から認められた、ということではない。そうではなくて、罪人が正しいと認められるのは、その人に対していま無償で一すなわち神の自由な恵みに基づいて一与えられる神の賜物としてだ、ということである。ヨブが正しいと認められたのは、まさにこの神の恵み以外の理由によるのではなく、この恵みが、神の裁きを通して神によって悔改めへと導かれた罪人に、神を愛し神に信頼する権利を授けるのである<sup>29</sup>」。

以上は、当該箇所に関連して見出される様々な矛盾の解決に心を砕くあまり、ヨブ記本文からは遥かにかけ離れたところにその解釈を求めようとした一例である。

しかしこうしたアプローチは、その辻褃合わせに汲々とするあまり、研究対象であるヨブ記本文自体の意味合いを否定することにもなりかねない倒錯的な方向だと言わざるを得ないだろう<sup>30</sup>。

### 1. 6. 問題提起

以上、42章7節についての従来解釈を、類型的に検証してきた。しかし見てきた通り、従来説では、一体何を以て神が友人たちを叱り、反語表現のようにしてヨブを褒めるようなことを語ってみせたのかについて、十分に説明されているとは言い難い。あるいは、従来テキスト理解それ自体に問題があったのではないかとも考え

られる。

そこで本稿では、ヘブライ語聖書BHS本文まで立ち帰り、当該箇所に関する従来の業績や諸研究を検証し直すことにしたい。

## 第2章 BHS本文と、翻訳聖書の検証

### 2.1. BHS本文

BHS本文における42章7節b γの記述は、

כִּי לֹא דִבַּרְתֶּם אֵלַי נְכוֹנָה כְּעַבְדֵי אִיּוֹב<sup>31</sup>

である。そしてS. E. Porterが指摘しているように、このテキスト自体に、大きな問題となるようなバリエーションは見られない<sup>32</sup>。したがって本稿でも、このテキストに基づいて、以後の考察を進めていくことにする。

### 2.2. 翻訳聖書の当該箇所訳文

#### 2.2.1 古代訳

当該箇所について、七十人訳、タルグム、ウルガタ訳では、それぞれ以下のように記述されている。

[七十人訳<sup>33</sup>]

οὐ γὰρ ἐλάλησατε ἐνώπιόν μου ἀληθῆς οὐδὲν ὡσπερ ὁ  
θεράπων μου Ἰωβ

[タルグム<sup>34</sup>]

אָרום לֹא מַלְלָתוֹן לוֹתִי בִּיּוֹנְתָא כִּיּוֹנְתָא הִיךְ עַבְדֵי אִיּוֹב<sup>35</sup>

[ウルガタ訳<sup>36</sup>]

quoniam non estis locuti coram me rectum sicut servus  
meus Iob

ここで注目されるのは、**אֵלַי**への訳語で、七十人訳では**ἐνώπιόν μου**、ウルガタ訳では**coram me**と、それぞれ「わたしの前に」に相当する語を当てている点である。

またアラム語訳であるタルグムにおいても、「わたしに向かって」と理解することのできる**לוֹתִי**の語が当てられている<sup>37</sup>。

一方**נְכוֹנָה**について、七十人訳は**ἀληθῆς**（「真実」）、ウルガタ訳は**rectum**（「正しいこと」）を当てている。またタルグムでは**בִּיּוֹנְתָא**（「理解」<sup>38</sup>）あるいは**כִּיּוֹנְתָא**が用いられている<sup>39</sup>。



### 2.2.2 欧米における近・現代訳

ここでは近・現代の欧米の主要な翻訳聖書として、BW6に搭載されたものの内、24の英語訳<sup>40</sup>と、7のドイツ語訳<sup>41</sup>に注目する。

まず英語訳では、אֵלַיについて、そのほとんどが「私について」という意味合いで理解しており、KJV、NIV、NAU、RSV、DBY、NKJなど多数がof me、BBE、TNK、NLTがabout me、YLT、NABがconcerning meという訳をそれぞれ当てている。唯一の例外はDRAで、古代訳と相通じるbefore me（「私の前」）という訳を当てている。

またנְכוּנָהについて、細部の違いを無視すれば、KJV、NIV、NAU、RSV、NKJなどをはじめとする多くが、これを目的語として捉えており、the thing that is right<sup>42</sup>、あるいはwhat is right<sup>43</sup>（いずれも「正しいこと」）という訳を当てている。またTNKはthe truth（「真実」）としている。

これに対してDBY、YLT、NAB、NJBではこれを副詞的に捉え、DBY、YLT、NABはrightly（「正しく」）、NJBはcorrectly（「正確に」）という語を当てている。またNLTだけは、right（「正しい」）と形容詞として捉えているが、訳文全体から考えれば、これも副詞的な意味合いとして理解される。

一方ドイツ語訳に目を転じてみると、LUO、LUT、EIN、L45、SCHでは、「ヨブ」の表記<sup>44</sup>を除けば全く同様に、英語訳のDBY、YLTに類似したものになっている。表記上の差異はあれ、意味合いとしてはELB、ELOも、ほぼ同様のものと見なすことができる<sup>45</sup>。

ところでאֵלַיの理解に注目してみると、LUO、LUT、EIN、ELO、L45、SCHではvon mir、ELBではüber michなど、いずれも英語訳と同様に「私について」という意味合いの訳語を当て、古代訳とは違った理解を示している。

一方נְכוּנָהについては、LUO、LUT、EINがrecht（「正しく」）の語を当て、DBY、YLTとの類似性を示している。これに対してELOではgeziemend（「相応しい」）を当て、適切さや妥当性といったニュアンスを出している。またELBはWahres（「真実」）を当て、目的語として理解している点で、英語訳のKJV、NIV、NAU、RSV、NKJなどとの類似性を見ることができる。

### 2.2.3 日本語訳

日本語訳では、新共同訳、新改訳<sup>46</sup>、フランシスコ会聖書研究所訳<sup>47</sup>、そして岩波書店版<sup>48</sup>の4つに注目するが、ここでも、大体の傾向は英語訳、ドイツ語訳の流れに収斂されていることが判る。

まずאֵלַיについては、新共同訳、新改訳、フランシスコ会聖書研究所訳ともに「わたしについて」で共通しており、英語訳、ドイツ語訳と同様の見方を採っている。た

だ岩波書店版だけは、「わたしに対して」と、古代訳に近い訳語を当てている。

一方נִכְוֹנָה־אֱלֹהִיםについては、新共同訳が「正しく」と副詞的な理解を示しているのに対し、新改訳は「真実」、フランシスコ会聖書研究所訳は「正しいこと」、岩波書店版は「たしかなこと」と、いずれも目的語として捉えている。

### 2.3. 問題の所在

以上、BHS本文と様々な翻訳について検証してきたが、この結果として、古代訳と近・現代訳の間には、その理解に若干の違いのあることが明らかになった。特に顕著なのがאֱלֹהִיםに関するもので、古代訳の「わたしの前に」あるいは「わたしに向かって」という理解に対し、近・現代訳ではその多くが「わたしについて」としている。またנִכְוֹנָהについては、多くのバリエーションが提示されているが、その理解としては、目的語か副詞かという2通りの考え方に収斂される。

ところでBHS本文に照らしてみれば、אֱלֹהִיםとנִכְוֹנָהの位置は、42章7節で示されているヤハウエの裁定の内容を確定する上で、重要な役割を帯びていると考えられる。しかし以上の検証によれば、その理解は、未だに論争の余地を残していることになる。そこで以下では、אֱלֹהִיםおよびנִכְוֹנָהについて、順に検証していくことにしたい。

## 第3章 אֱלֹהִיםに関する従來說と検証

### 3.1. אֱלֹהִיםについての諸説

すでに見てきたように、近・現代訳の聖書では、日本語訳を含めた大勢が、当該箇所のアֱלֹהִיםを「私について」と解している。しかしながらאֱלֹהִיםは、文法的に見れば前置詞אֶלに1人称の代名詞の接尾辞「־י」を伴った形であり、אֶלが動きの向きや、方向を示す語<sup>49</sup>であることを考えると、その直訳は「私に（対して）」<sup>50</sup>となる。すでに見てきたように、古代訳は広義において、これに則した翻訳を採っていると考えられる。

ところで従来の研究者たちの間にも、こうした古代訳と近・現代訳の間に認められるのと同様の見解の相違を見ることが出来る。そこで以下ではこれらについて、当該箇所を「私について」と解する説と、「私に（対して）」と解する説とに分けて見ていくことにする。

### 3. 1. 1 אֲלִיを「私について」とする説

BDBは、אֲלִיとעַלが明らかに区別なく使われている点を指摘<sup>51</sup>するとともに、話すことに関連する動詞とともに用いられる際には、אֲלִיは「～について」という意味で使われるとしている<sup>52</sup>。HALATもまた、אֲלִיがעַלの意味で使われ、逆もまた同様であるとしている<sup>53</sup>。

このように、ヘブライ語聖書においてはאֲלִיとעַלとがしばしば交換可能な関係にあるという特殊な法則性がある。そこで、当該箇所においてもこれを適用し、אֲלִיを「私について」あるいは「私に関して」と理解しているのがこの説である。

例えばG. B. Grayは、当該箇所のאֲלִיをעַלと同一視し、同様のケースとして、サムエル記上3章12節と列王記上6章12節を挙げている<sup>54</sup>。またE. Dhormeは、語るという意味合いを持った動詞דָּבַרの後では、עַלの代わりにאֲלִיが用いられるとして、エレミヤ書40章16節bを同様の例に挙げている<sup>55</sup>。

この説は、ヘブライ語聖書において見られる、אֲלִיとעַלとの特異な法則性を基礎にしている点で傾聴に値する。ただ、では果たして当該箇所にもその特殊な法則性を適用できるのかどうかという点になると、その可能性を示唆することはできても、決定力には欠けているように思われる。

### 3. 1. 2 אֲלִיを「私に（対して）」とする説

一方、当該箇所を「私に（対して）」と解する説の代表であるKarl Buddeは、「すべての人の話は、聞き手としての神を持ち、そして彼へと向けられる」ことをその理由として、「私に」と訳すことを提案している<sup>56</sup>。

また近年では、当該箇所でも神の言及しているのが「祈り」であると考えれば、אֲלִיの本来の意味や古代訳の例などと符合すると指摘するRickie D. Mooreがこの説を採用している<sup>57</sup>。さらにOemingも、「私について」とする説の主張も踏まえながら、前置詞אֲלִיとדָּבַר、あるいはאָמַרとの関係を考察することで、やはり「私に」とする立場を採っている<sup>58</sup>。それによれば、ヨブ記において、דָּבַר、あるいはאָמַרに伴われたאֲלִיは、いずれの場合にも、対象への向きを指し示す「～に（対して）」という意味で使われているという<sup>59</sup>。

ところでその評価だが、Buddeの主張は、その論拠として、彼の神学論への依存が過ぎるように映る。またMooreのそれは、コンテキスト理解への依存度が高く、אֲלִי単体を取り上げての論拠としては説得力に欠けていると言わざるを得ない。

一方Oemingの主張は、ヨブ記という具体的な対象の中での一貫性を、テキストに基づいて実証している点で、高く評価することができるだろう。ただその半面では、その検証の範囲がヨブ記に限定されている点で、ヘブライ語聖書における普遍性を主

張し得ない不十分さも残している。

### 3.2. $\text{אֵלַי}$ についての検証

#### 3.2.1 目的と方法

$\text{אֵלַי}$ を「私について」とする説は、 $\text{אֵל}$ と $\text{עַל}$ が交換可能な関係にあるという、ヘブライ語聖書に見られる特殊な法則性を、当該箇所にも適用しようとしている点で演繹的である。これに対して「私に（対して）」とする説、中でもOemingの説は、当該箇所を含むヨブ記そのものに根差した、具体的な検証の成果を背景にしている点で帰納的であり、その姿勢において、両者は好対照をなしている。だがそれだけにまた、両者の論点の間には、出発点と姿勢の違いに基づくすれ違いも見られる。このため、 $\text{אֵלַי}$ の理解としていずれの説が妥当かを判断するためには、別途、双方の論点の要素を組み込んだ独自の検証が必要だと考えられる。

そこで以下では、当該箇所で使用されている $\text{אֵלַי}$ という語形の使用例に注目することで、当該箇所に根差しながら、さらにはその対象をヘブライ語聖書全体に拡大することでその普遍性をも考え合わせた、鍵語検索による検証を試みることにしたい。

#### 3.2.2 $\text{אֵלַי}$ についての検証

前置詞 $\text{אֶל}$ の接尾辞1人称形である $\text{אֵלַי}$ は、BHSに合計446回登場する<sup>60</sup>。ちなみにこの446回の登場中、 $\text{אֶל}$ と連動している動詞は43種類<sup>61</sup>あり、10回以上使われているものを頻度の高い順に見てみると、 $\text{אָמַר}$ 132回、 $\text{הָיָה}$ 69回<sup>62</sup>、 $\text{בּוֹא}$ 46回、 $\text{שָׁמַע}$ 28回、 $\text{דָּבַר}$ 26回、 $\text{שׁוּב}$ 18回、 $\text{שָׁלַח}$ 16回、 $\text{נָגַשׁ}$ 11回—などとなる。このうち $\text{אָמַר}$ 、 $\text{דָּבַר}$ 、 $\text{שָׁמַע}$ は、BDBが、通常は $\text{עַל}$ の意味である「～について」という意味合いを $\text{אֶל}$ に持たせる傾向のある、話すことに関連する動詞として挙げた5つの内の3つ<sup>63</sup>であり、その合計登場回数186回は、 $\text{אֵלַי}$ の全登場回数の41.7%を占める。

ところで、合計446回登場する $\text{אֵלַי}$ がそれぞれの登場箇所、どのような意味で理解されているのかを、新共同訳に照らして検証してみると、当該箇所、およびそれと同様の表現と思われる42章8節とを除くすべての箇所で、運動の向きや方向を示す $\text{אֶל}$ の基本的な意味の範囲内に止まっていることが分かる<sup>64</sup>。

このことは、 $\text{אֵלַי}$ を「私について」とする説が主張している $\text{אֵלַי} = \text{עַלַי}$ という理解が、少なくともBHSの他の箇所においては見出せないということの意味する。

しかも、 $\text{אֵלַי}$ と $\text{עַלַי}$ が同時に出現しているエゼキエル書3章22節でも、双方に意味の混同は見られない。つまり、少なくとも $\text{אֵלַי}$ には、「私について」とする説が指摘するような、意味上のぶれを確認することができないことになる。

### 3. 3. אֱלִי についての本稿の理解

これまで概観してきたように、当該箇所のアֱלִיについては、大きく「私について」という理解と、「私に（対して）」という理解との2説がある。しかしながらヘブライ語聖書におけるアֱלִיの用例を調べると、当該箇所を除いたすべての登場箇所を「私に（対して）」という意味合いで理解することができる。前に取り上げたOemingの論証も併せると、当該箇所におけるアֱלִיもまた、前置詞אֶלの基本的な意味に基づいて理解することが妥当であると考えられる。

また、これまではאֱלִיとעָלַיの関係性を軸に論じてきたが、ヨブ記の本体部分において、3人の友人には神に対する語り掛けが1度も見られないのに対し、ヨブは58回にわたって神への語り掛けを行っているというD. Patrickの研究成果<sup>65</sup>も、「私に（対して）」とする説を補強するものと言えるであろう。

このため本稿では、当該箇所のアֱלִיを「私に（対して）」と理解することとし、次にנְכוֹנָהについての考察に移りたい。

## 第4章 נְכוֹנָה に関する従來說と検証

### 4. 1. נְכוֹנָה の位置付けと原義

まず、נְכוֹנָהの基本的な性格と意味について、辞書の内容を中心に検証していく。

#### 4. 1. 1 נְכוֹנָה の文法上の位置

BDBによれば、נְכוֹנָהは動詞כּוֹןのニファル形女性単数の分詞に分類される<sup>66</sup>。そしてこの文法的な位置付けについて、特に異説はないように思われる。

ちなみにכּוֹןはII-1形の弱動詞で、これを語根とする動詞は、BHSにおいて219回登場する<sup>67</sup>。このうちニファル形をとるのは68回で、その半数強に相当する35回が分詞で占められている。しかしニファル形の分詞の内、女性単数形で出現する場合は、当該箇所とその繰り返し部分を含めても、列王記上2章46節、詩編5編10節との計4回しかない。

#### 4. 1. 2 כּוֹןの原義

כּוֹןの出現箇所を新共同訳と照らし合わせてみると、この言葉が多義性に富んでいることが分かる<sup>68</sup>。

ところでその原義について、BDBではbe firm<sup>69</sup>（「堅固にする」）、HALATではfest, gerade sein<sup>70</sup>（「堅固たる」「まっすぐな、率直な」）を挙げている。またTHATでכּוֹן

の項目<sup>71</sup>を担当したE. Gerstenbergerは、dauerhaft, wahr, treu sein / werden<sup>72</sup> (堅牢な、真正の、正確な) を一般的な意味として捉えている。

しかし、219回の出現箇所を検証する限り、この言葉の原義はもう一段深いところで、あるものが、ある想定された状態に「ある」、あるいは「なる」ことを指し示しているのではないと思われる。この見方は、ThWATでכּוֹן<sup>73</sup>の項目を担当したK. Kochが、その原義について、「固定された状態というよりは、むしろ作られている、あるいはなりつつあるもの<sup>74</sup>」といった動的なイメージを示すとともに、「その働き(個人生活において、社会において、もしくは宇宙において)を独立し、永続して果たす、そうした存在に向かうものを言う<sup>75</sup>」と述べているのと相通じるところを持っている。

また、これに照らして注目されるのが、和田幹男の指摘である。和田はהיהに相当する語が存在しなかったフェニキア語やウガリト語などの北西セム語において、כּוֹןがそれに替わる機能を果たしてきた点を指摘し、ヘブライ語聖書の中でも、כּוֹןがהיהと同様の意味合いで用いられていたのではないかという見方を示している<sup>76</sup>。Kochもまた、כּוֹןの系列が持つ意味合いの幅の広さについて、「なる」、「ある」といった、存在論的な概念まで表現できると考えている<sup>77</sup>。

こうした点から見て、כּוֹןはもともと存在論的な、極めて基本的な意味合いを示す言葉であり、だからこそ、コンテキストの違いに応じて、照らし出される意味合いにも様々な広がりが生じたのだらうと推測される。

#### 4. 1. 3 辞書におけるנְכוּנָהの理解

当該箇所のנְכוּנָהについて、BDBはwhat is right, the right<sup>78</sup> (「正しいこと」「正しさ」)、HALATはZuverlässiges, Wahres<sup>79</sup> (「確かさ」「真実」) という見方を示している。またThWATは、当該箇所での関連として、die Zuverlässigkeit einer Rede zu bezeichnen<sup>80</sup> (「ある話の信頼性を示すこと」)、THATはdas Richtige, das man ausspricht<sup>81</sup> (「人の述べる正しさ」) という理解を示している。

これらはいずれも、当該箇所のנְכוּנָהを、詩編5編10節のנְכוּנָהと同様の性格のものと考え、それに伴って、当該箇所のנְכוּנָהを目的語として理解している点で、明らかな共通性を窺わせている。

#### 4. 2. נְכוּנָה についての従来の理解

次に、当該箇所におけるנְכוּנָהについての従來說を概観する。

נְכוּנָהについては、すでに見てきたように、翻訳聖書においても様々な語が当てられている。これは、נְכוּנָהの語根に当たる כּוֹן という語それ自体が持つ多義性由来するものだと考えられる。このため、従来の研究者たちの業績にも様々なバリエー

ションが認められ、翻訳聖書の訳と重複するもの、類似したものを省いても、なおいくつかの例を取り出すことができる。

例えばKarl Budde はaufrechtig (「誠実な、正直な」) を訳語に当て<sup>82</sup>、N. C. ハーベルは「当然言うべきこと」と考えている<sup>83</sup>。

さらに近年でも、Rickie D. Mooreがstraight (「率直に」) という解釈を著している<sup>65</sup>のをはじめ、当該箇所における鍵語としてこの語に注目したDuck-Woo Namも、constructively<sup>85</sup> (「建設的に」) という考えを提示している。

すでに見てきた通り、翻訳聖書のנְכוֹנָה理解は、それを目的語と考えるか、副詞として考えるかに大別できるが、その分類に基づけば、N. C. ハーベルは前者、Budde と Moore、Namは後者ということになる。

### 4.3 נְכוֹנָה についての検証

これまでに見てきた通り、当該箇所のנְכוֹנָהに関する説は近年になっても新説が登場するなど多様性を示している。しかしながら本稿の理解によれば、各種の翻訳聖書で見られた、目的語としての理解と、副詞としての理解という2つのタイプへの収斂は、近年のものまでを含めた諸研究の成果に対しても十分有効性を持ち得ているようである。

そこで以下では、それぞれを「目的語」説、「副詞」説と称するとともに、それぞれの理解の妥当性に絞って、いくつかの観点から検証を加えていくことにしたい。

#### 4.3.1 文法上の妥当性

נְכוֹנָהがニファル形分詞の女性単数であることは、すでに見てきた通りである。またこの形は、BHSでも、当該箇所とその繰り返し箇所以外では列王記上2章46節と、詩編5編10節の2箇所にしか現われない特殊なものであり、新共同訳によれば、前者は「揺るぎないものとなった」、後者は「正しいこと」と訳されている。

だが、だとすると、当該箇所では何故女性形が採られているのであろうか。というのも、列王記上2章46節の場合は、それに対応する主部がהַמְּלָכָה (王国) と女性名詞だが、当該箇所の周辺には、一見して女性単数の主部が見当たらないのである。

これに関連してGesenius' *Hebrew Grammar*では、前に挙げた辞書群がいずれも当該箇所との深い関連性を見ている詩編5編10節のנְכוֹנָהをその一つとして例示しながら、抽象名詞が、女性形の形容詞や分詞によって表現されることを指摘している<sup>86</sup>。だとすれば、当該箇所は「目的語」説の理解の通り、名詞=目的語と考えることができる。

ただその一方で、同じGesenius' *Hebrew Grammar* には、特に女性形の形容詞が、

副詞として使われるという言及も見られる<sup>87</sup>。分詞は形容詞としても理解できるので、当該箇所にはこの法則を当て嵌めて考えることも可能である。これによって「副詞」説もまた、文法面での裏付けを得たことになる。

以上から、文法上は両説ともに論拠があり、問題はないものと考えることができる。

#### 4.3.2 構文上の妥当性

当該箇所は、動詞**רָבַח**のピエル形を主動詞に文章が構成されている。「目的語」説にしても「副詞」説にしても、この**רָבַח**のピエル形が好む構文上の相性を無視して語ることはできない。そこで次に、そうした点について検証してみたい。

**רָבַח**のピエル形はBHSにおいて1092箇所が登場する<sup>88</sup>。これらの箇所について、新共同訳に照らしてその構文に注目してみると、**רָבַח**のピエル形が「目的語」説に該当すると考えられる語句を取っている箇所は237箇所<sup>89</sup>、「副詞」説に適合する語句を取っていると考えられる箇所は157箇所ある。

なお、双方の説に該当すると思われる語句を同時に取る場合は26箇所、**「目的語」**説に該当すると思われる語句のみを取る場合は211箇所、「副詞」説に該当すると思われる語句のみを取る場合は131箇所だった。

この結果、**רָבַח**のピエル形は、構文上、「副詞」説よりも「目的語」説に該当すると考えられる語句の方をより好む傾向のあることが分かる。しかしその出現率は、「目的語」説に該当すると考えられる語句を取る場合でも全体の2割強に過ぎない。一方、「副詞」説に該当すると思われる語句を取る場合でも全体の1割強を占めており、両者の関係は必ずしも排他的な格差を示すものではないと考えられる。

したがって構文上も、両説ともに問題はないものとみなして良いだろう。

#### 4.3.3 コンテキスト上の妥当性

では、ヨブ記のコンテキストに照らして両説を検証してみるとどうなるのか。ここでは2つの点から、その妥当性について考える。

##### 4.3.3.1 ヤハウエによる否定と肯定

顕現したヤハウエのヨブに対する語り口(38～41章)は、本体部分でヨブが語った内容への否定を思わせる。そうであれば、本体部分でヨブが語った内容そのものは、ヤハウエによって否定されたものと理解される。だが当該箇所の問題となる**נְכוּנָה**は、ヤハウエによって肯定的な意味合いでエリファズ(及び残りの2人)へと提示されている。

ところでこれを「目的語」説の立場で説明しようとする、1つの矛盾が生じてく



る。つまり同説に立てば、その指示内容が何であれ、必然的に、ヨブは**נִכְוֶנֶה**が指示するところを語ったことになる。だがそうであれば、ヤハウエは、ヨブに対して否定したものを、エリファズらに対しては肯定的に提示したということになる。

「目的語」説がこの矛盾を解消するためには、ヨブの言葉について、否定された部分と肯定された部分とを明確に区別して説明する必要がある<sup>90</sup>。だがすでに見てきた通り、こうした点について、「目的語」説の論拠となる決定的な回答は示されていない<sup>91</sup>。それどころか、本文の中に具体的な対応箇所を探すことを拒む説さえが見られる。やや趣の異なるところでも、例えばS. E. Porterが、当該箇所の曖昧さを理由に、具体的な指示内容を探すことを心得違いの試みだと指摘していることも無視することはできない<sup>92</sup>。これらは、「目的語」説としての弱みだと言えよう。

一方「副詞」説の立場に立つと、**נִכְוֶנֶה**の指示内容を、ヨブの語った内容ではなく、その様態として考えることができる<sup>93</sup>。これは、ヨブの語った内容それ自体と**נִכְוֶנֶה**とを分離して考えることで、この項で問題としている矛盾の解消が可能になる。さらに同様の理由で、ヤハウエの言葉の理解、ひいてはヨブ記そのものの理解に、「目的語」説とは違った光を当てることも可能になると考えられる。

#### 4.3.3.2 「私の怒り」から

本稿が考察対象としているヨブ記42章7節b $\gamma$ の直前文に当たるb $\beta$ に、**אֲפִי הִרְרָה**という件がある。ヨブの3人の友人たちに対する、ヤハウエの裁定の内に含まれた言葉である。新共同訳は「わたしは（中略）怒っている」という訳を当てているが、直訳すれば「私の怒りは燃える」となる。

この**אֲפִי**という語は、いずれもヤハウエを主体として、BHS中に22回現れる。そのうち、同箇所を含めた6回が、**הִרְרָה**を主動詞にしている。

ここで主動詞**הִרְרָה**とのセットで出現する他の5回について、その怒りの理由として挙げられている内容に注目してみると、申命記31章17節とホセア書8章5節は、それぞれイスラエルによってヤハウエとの契約が破られた（る）こと（申命記31章16節、ホセア書8章1節）が、出エジプト記32章10節ではイスラエルのかたくなさ（出エジプト記32章9節）が、出エジプト記22章23節では、ヤハウエが苦しめてはならないとした寡婦や孤児が叫ぶこと（出エジプト記23章22節）が、またゼカリヤ書10章3節では羊飼いの不在（ゼカリヤ書10章2節）が、それぞれ対応していると考えられる。

ところでさらにこれらの箇所の周辺に注目してみると、申命記31章18、20節<sup>94</sup>では、それぞれ「他の神々に向かう（い）」、ホセア書7章7、14節では、それぞれ「ひとりとして、わたしを呼ぶ者はなかった」（ホセア書7章7節）、「彼らは心からわたし

の助けを求めようとはしない」(ホセア書7章14節)という件を見出すことができる。

またその一方、出エジプト記22章23節に対応した同23章22節には、「もし、あなたが彼を苦しめ、彼がわたしに向かって叫ぶ場合は、わたしは必ずその叫びを聞く」とある。

これらから読み取ることができるのは、まずヤハウエに対して向き合うこと、そして助けを求め、あるいは叫びを上げる者にヤハウエが応えるという、人とヤハウエとの呼応関係であろう。

こうした点を参考に、当該箇所の意味内容についての類推を試みるなら、ここで問われているのはその内容ではなく、むしろ生々しくも赤裸々な語り掛けそのものであるように思われる。だとすれば、より適合性の高いのは、そうした有り様を指示する言葉であるに違いない。逆に、「目的語」説の多くが訳語としている「真実」や「正しいこと」などは、似つかわしくないように思われる。

#### 4.4. 本稿のכֹּנֵה־理解

以上の考察を通じて、本稿では、当該箇所のכֹּנֵה־について、「副詞」説を採用のが妥当だと考える。

残された問題は、一体どんな訳語を当てるのが最も相応しいのか、である。そこで、これまでに翻訳聖書や従来説で採られてきた「副詞」説を振り返ってみると、翻訳聖書では「正しく」(DBY、LT、LUO、LUT、EIN、新共同訳)が共通した例として見られ、その他には、研究者たちの業績として、「誠実な、正直な<sup>95)</sup>」、「率直に<sup>96)</sup>」、「建設的に<sup>97)</sup>」などが提示されていた。

ところで、これまでの検証の経緯に基づいて、本稿として重視したいのは、前節で取り上げたコンテキスト上の問題点をクリアする上から、その指示内容が、ヨブの語った内容そのものとの重なりを持たない様態であること、さらには危急の叫びといったような要素を含んでいること、などである。

そうした要件に照らしてみると、今回取り上げてきた翻訳聖書や研究成果の中では、「率直に<sup>98)</sup>」が目される。

また、当該箇所の訳語を考える上においては、その語根 כֹּן が持つ多義性に依存することなく、でき得る限り原義に近いものが好ましいと思われるが、ここで「率直に」(Mooreの提唱する原文ではstraight<sup>99)</sup>)は、HALATが挙げている原義の1つ gerade sein<sup>100)</sup> (「まっすぐな、率直な」)に符合し、この点でも妥当性を持つと考えられる<sup>101)</sup>。

こうしたことから本稿では、当該箇所のכֹּנֵה־について、Mooreの提唱する「率直に」をベースに、ヤハウエが賞賛したのは、ヨブの語った内容それ自体ではなく、ヨ

ブがヤハウエに対して行ってきた、その率直な語り掛けそのものであったのだと理解したい。

## 結論

本稿では、ヤハウエによって下された裁定という意味合いから、ヨブ記の主題を考えてみる上でより深い理解が不可欠であろう、42章7節について考察してきた。その中心を占めたのは、従来理解の不十分さを検証し、BHS本文へと立ち帰る中で、特に鍵語として浮上してきた、**אֱלֹהֵי**と**נִכְוֹנָה**という2つの語の検証であった。

その結果**אֱלֹהֵי**は、近代以降の翻訳聖書が示しているように、ヤハウエのことを指示しているのではなく、ヤハウエに対する向きを表しているのだということが理解された。また**נִכְוֹנָה**については、コンテキスト上、目的語としてよりは副詞として捉える方が相応しく、同時に、そこには赤裸々な叫びとの共鳴が窺えることを見てきた。

こうしたことから本稿では、BHS本文のヨブ記42章7節b $\gamma$

**כִּי לֹא דִבַּרְתָּם אֵלַי נִכְוֹנָה כְּעַבְדֵי אֵיִיב:**

の訳として、「お前たちは、わたしに向かって、わたしの僕ヨブのように、率直に語らなかったからだ」が妥当であると考えに至った。

この結果は図らずも、Rickie D. Mooreの研究成果としての“you have not spoken straight to me, as my servant Job has.”に準じるものとなった。しかし本稿では、鍵語検索を軸とする実証性に重きを置くなど、Mooreの論考に対して一定の独立性を保っており、その違いは、当該箇所を巡る神学的解釈にも反映されることであろう。

Mooreがその研究の下地としたのは「祈り」であった<sup>102</sup>。これに対して本稿が重視したいのは、人とヤハウエとの関係性の問題である。そして、そのあるべき関係性については、今、当該箇所に関する従来の一般的な解釈と、本稿の成果とのずれの中にこそ見出すことができるように思うのである。

つまりヤハウエは、人に認識や行為としての模範解答を求めているわけではなかった。ましてやその完全性を求めていたのでもなかった。ただ人がヤハウエに向かい、そして率直に叫び、訴えること、そうすることによって絶えずヤハウエとの間に交わりを持ち、ひとつであろうとすることをこそ欲していたのではなかったかと考えたい。言い換えれば、ヤハウエと人との義しい関係とは、固定化された教義や律法によって語り尽くされるような静的なものではなく、丁度、「我と汝」の関係性を彷彿とさせるような、より深い人格的な関わり合いと交わりの内にこそ見出し得るものだったのではないだろうか。本稿で取り上げてきた**נִכְוֹנָה**の語根**כּוּן**が原義として持つ脈動

に触れてきた後には、そうした理解がより相応しいものに思われてならない。

本稿の問いに照らして言えば、ヨブは、ヤハウエの求めるそうした関係性を満足させるに足りる、稀有の人物だったのであろう。だからこそヤハウエは、ヨブをこそ賞賛せずにはいられなかったのである。

だがいつしか、ヤハウエの絶対化が始まる中で、人は自ら、そうした関係性から身を遠ざけるようになっていたのではないだろうか。

野本真也は「創造における『分離』というモチーフは、関係性の創造という事態を意味しているといってもよい。したがって、関係性を正しく認識することが、神の創造の意図、つまり存在の意味を正しく認識することになるのである<sup>103</sup>」と述べているが、ヤハウエと人との関係性は、まさにそうした観点から、改めて捉え直される必要があるように思われてならない。

#### 注

1 厳密には、42章7節by。

2 本稿は、2005年1月に同志社大学大学院神学研究科に提出した修士論文『神は何故ヨブを褒めたのか—ヨブ記42章7～8節に関する一考察—』を元に、2005年9月、関西学院大学にて開催された日本基督教学会第53回学術大会で行った発表内容を一部修正したものである。特にことわりのない場合、聖書箇所の内容と聖書各書名の略語は『聖書 新共同訳』に準拠する。また諸外国語訳聖書名や辞書名などの略語は、以下の通りとする。

ASV American Standard Version.

BBE The Bible in Basic English.

BDB A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament: with an appendix containing the Biblical Aramaic.

BHS Biblia Hebraica Stuttgartensia.

BW6 BibleWorks 6.0.

DBY The Darby Bible.

DRA The Douay—Rheims American Edition.

EIN Einheitsübersetzung.

ELB Revidierte Elberfelder.

ELO Unrevidierte Elberfelder.

ESV English Standard Version.

GNV Geneva Bible.

HALAT Hebräisches und aramäisches Lexikon zum Alten Testament.

JPS	Jewish Publication Society OT.
KJG	King James with Strong's and Geneva Notes.
KJV	King James with Codes.
L45	L45 Luther Unrevidierte 1545.
LUO	Luther Bibel with Codes.
LUT	Revidierte Lutherbibel.
LXT	LXX Septuaginta Rahlfs <sup>1</sup> .
NAB	The New American Bible.
NAS	New American Standard Bible with Codes (1977).
NAU	New American Standard Bible with Codes (1995).
NIB	New International Version (British).
NIV	New International Version (us).
NJB	The New Jerusalem Bible.
NKJ	New King James Version.
NLT	New Living Translation.
NRS	New Revised Standard Version.
RSV	Revised Standard Version.
RWB	Revised Webster Update with Codes.
SCH	German Schlachter Version.
SESB	Stuttgarter Elektronische Studienbibel.
TAR	Targumim (Aramaic OT) (Text).
THAT	Theologisches Handwörterbuch zum Alten Testament.
ThWAT	Theologisches Wörterbuch zum Alten Testament.
TNK	JPS Tanakh.
VUL	Latin Vulgate.
WEB	The Webster Bible.
WTT	BHS Hebrew Old Testament (4th ed).
YLT	Young's Literal Translation.

3 42章7節bγ。

4 日本では松田明三郎（参照、松田明三郎『ヨブ記註解』日本基督教団出版部、1957年）、関根正雄（参照、関根正雄『ヨブ記註解』新地書房、1982年）、岩波版聖書（『ヨブ記 箴言』岩波書店、2004年）などが「序曲」「終曲」という用語を採用している。

5 ロバート・ゴルディスは、特に24-37章が大きな損傷を負っていると考えている。参照、ロバート・ゴルディス『神と人間の書：ヨブ記の研究（上）』船水衛司訳、教文館、1977年、256、257頁。

- 6 和田幹男「ヨブ記」『新共同訳 旧約聖書注解II』日本基督教団出版局、1994年、23頁。
- 7 並木浩一「ヨブ記 解説」『ヨブ記 箴言』岩波書店、2004年、357頁。
- 8 ゴルディスは「文体や内容の主な特徴を変えることなし」に用いたと考えている。参照、ゴルディス、上掲書（注5）、181頁。
- 9 関根は、サタンの提起する問題をはじめ、その思想の深さを理由に、単に民間伝承を用いただけではないと考えている。参照、関根、上掲書（注4）、2、3頁。またGeorg Fohrerは、民間伝承から稗物語に至るまでの変容の過程について考察している。Cf. Georg Fohrer, *Introduction to the Old Testament*, trans. by David E. Green, Nashville: Abingdon Press, 1968, pp.325f.
- 10 ゴルディスは、「同じ著者の人生の終わりの時期の著作」とする見方を示している。参照、ゴルディス、上掲書（注5）、261頁。
- 11 J. L. クレンショウは「散文体の物語と詩文体の対話の間に対立が残っている。両者の相違は余りに顕著」であり、「多くの学者は物語部分が提供する鍵で、対話部分を解釈することを避けている」と言う。参照、J. L. クレンショウ『知恵の招き：旧約聖書知恵文学入門』中村健三訳、新教出版社、1987年、123頁。
- 12 「ヨブ記の中で、この説話は効果的な背景を備え、その詩的な説話を引き立てるために修正されてきた。厳密に、詩人はいかに元の説話を書き直したかが議論される」（N. C. ハーベル『ヨブ記』高尾哲訳、新教出版社、1994年、7頁）。
- 13 ゴルディス、上掲書（注5）、181、182頁。
- 14 例えばバルトは、本稿での考察対象と同じ箇所を足場に所論を展開している。参照、バルト『ヨブ』ゴルヴィツァー編・解説 西山健路訳、新教出版社、1969年。
- 15 厳密には42章7節b $\gamma$ 。この表現は、同8節b $\beta$ にも繰り返し出現するが、本稿では7節b $\gamma$ に集約して考える。
- 16 Cf. Manfred Oeming, "Ihr habt nicht recht von mir geredet wie mein Knecht Hiob: Gottes Schlusswort als Schlüssel zur Interpretation des Hiobbuchs und als kritische Anfrage an die moderne Theologie," *Evangelische Theologie* 60 (2000): S.104–112.
- 17 Cf. Josef Schreiner, *Theologie des Alten Testaments*, Würzburg: Echter, 1995, S.181.
- 18 参照、和田、上掲書（注6）、86頁。
- 19 松田は、「詩人の時代」には神の正義の統治が「此の地上の生活に局限されていた」という留保を加えながらも、この箇所を以て、「詩人の立場」が、ヨブの友人たちと「本質的に相違していないと云うことになる」と指摘する。参照、松田、上掲書（注4）、466、467頁。
- 20 G. フォン・ラート『イスラエルの知恵』勝村弘也訳、日本基督教団出版局、1988年、340、341頁。
- 21 参照、J. C. L. ギブソン『ヨブ記』滝沢陽一訳、新教出版社、1996年、438—439頁。
- 22 なおギブソンは同書441頁で、応報論の否定についても論じている。
- 23 例えばクレンショウは、ヨブが語った神についての真理として2：10を挙げるが、3人の友人たちの誤りについては、いわゆる民間本の失われた箇所へと押しつけるに止まっている。参照、クレンショウ、

- 上掲書（注11）、128頁。
- 24 Cf. Gustav Hölscher, *Das Buch Hiob*, Tübingen: Mohr, 1952, S.4.
- 25 またFohrerは、いわゆる民間伝承の原型を想定するところから同じ箇所を挙げるが、すでに挙げた理由から、本稿には馴染まない。Cf. Georg Fohrer, *Das Buch Hiob*, Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, 1963, S.539.
- 26 Cf. Jürgen Ebach, “Gott und die Normativität des Faktischen: Plädoyer für die Freunde Hiobs,” *Hiobs Post: gesammelte Aufsätze zum Hiobbuch zu Themen biblischer Theologie und zur Methodik der Exegese*, Neukirchen—Vluyn: Neukirchener, 1995, S.62f.
- 27 ギブソン、上掲書（注21）、439頁。
- 28 Cf. U. Berges, “Hiob in Lateinamerika. Der leidende Mensch und der aussätzige Gott,” *The Book of Job*, Leuven: Peeters, 1994, pp.314f.
- 29 A. ワイザー『ヨブ記』松田伊作訳、ATD・NTD聖書註解刊行会、1982年、506、507頁。
- 30 同様のことはバルトにも言える。彼は上掲書、94頁などで、テキスト内に42章7節との対応箇所を見つけようとする努力を適切ではないと言う。それは、ヨブが「ヤーウエのしもべとして一語一語正しいことを述べる、そして誤りうる人間としてどの言葉においても正しくないことを述べる」「義人にして罪人！」（バルト、上掲書、95頁）であることが、彼にとっては自明なことだからである。
- 31 BW6、WTTより。
- 32 Cf. S.E.Porter, “The Message of the Book of Job: Job 42:7b as Key to Interpretation?” *The Evangelical Quarterly*, vol.63—4 (1991), pp.291—304.
- 33 BW6、LXTより。
- 34 BW6、TARより。
- 35 ただしDavid M. Stecの研究によれば、行頭から5、6語目の**בִּינְנָה**と**בִּינְנָה**は、各種資料で用いられている異なる表記が重複記載されているのではないかと思われる。ちなみに彼自身は、42章7節に**בִּינְנָה**を採用している。Cf. David M. Stec, *The Text of the Targum of Job: An Introduction & Critical Edition*, Leiden & New York : E. J. Brill, 1994, pp.305\*f.
- 36 BW6、VULより。
- 37 ただしこの語は同時に「わたしに関して」と理解することも可能で、この語が帯びる両義性は、Céline Manganの業績にも興味深い反映をもたらしている。Céline Mangan, “The Targum of Job,” *The Targum of Job, Proverbs, Qohelet*, Minnesota: The Liturgical Press, 1991は、MS Cambridge, University Library Ee.5.9を底本にしているが、p.90における42章7～8節の訳出に当たっては、ともにtowards meを当てている。しかしながら文脈の相違もあって、7節では「私について」、8節では「私に対して」と理解することが可能であるように思われる。
- 38 Mangan, *ibid.*
- 39 Stec, *loc. cit.* それによれば、同書の底本MS Cambridge, University Library Ee.5.9は、42章7節b y

- にאניניを用いている。
- 40 具体的にはKJV、NIV、NAU、RSV、DBY、YLT、NKJ、ASV、BBE、ESV、GNV、JPS、KJG、NAS、NIB、NKJ、NRS、RWB、WEB、TNK、NAB、NJB、NLT、DRA（順不同）。
- 41 具体的にはLUO、LUT、EIN、ELB、ELO、L45、SCH（順不同）。
- 42 KJV、JPS、ASVなど。
- 43 NIV、NAU、RSV、DBY、NKJなど。
- 44 「ヨブ」の表記は、LUO、LUT、L45、SCHではHiob、EINではIjob。
- 45 ここでは詳細について触れないが、M. Buber & Rosenzweigの*Die Schrift*（Stuttgarter Elektronische Studienbibel より）も、表現上の差異はあれ、意味合いとしては同様のものと理解される。
- 46 『新改訳聖書第3版』。Jーばいぶる1st 2000アドオンデータより。
- 47 『ヨブ記：原文校訂による口語訳』フランシスコ会聖書研究所訳注、中央出版社、1986年。
- 48 『ヨブ記 箴言』並木浩一・勝村弘也訳、岩波書店、2004年。
- 49 BDBはאניניの意味を、「動きや方向の向きの外延を示す」とし、用例の9分類中7つを、動きの向きや、方向に直接関連したものと定義している。Cf. BDB, pp.39f, “אניני”. またHALATは、基本的な意味を nach…hin、auf…zuとし、9分類中4つについて、向きや方向を示す直接的な定義に当てている。Cf. HALAT, S.48f, “אניני”.
- 50 この「(対して)」は、「私に」が持つ、方向を指示する性格を明確にするための補助的な付加表現で、意味上のバリエーションを示すものではない。以下での使用も同様である。
- 51 Cf. BDB, p.41, “אניני” Note 2.
- 52 ここで具体的に挙げられている動詞は、אמר、דבר、ספר、צוה、שמעの5つ。BDB, p.40, “אניני” 6.
- 53 HALAT, S.49, “אניני” 3.
- 54 Cf. G. B. Gray (with S. R. Driver), *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Job*, Edinburgh: Clark, 1986, p.348. ただし新共同訳は、いずれの場合にも、向き、方向を意味する訳を当てている。
- 55 Cf. E. Dhorme, *A Commentary on the Book of Job*, trans. by Harold Knight, London: Nelson, 1967, p.648.
- 56 Cf. Karl Budde, *Das Buch Hiob*, 1896, p.254.
- 57 Cf. Rickie D. Moore, “Raw Prayer and Refined Theology: ‘you have not spoken straight to me, as my servant Job has’,” *The Spirit and the Mind: Essays in Informed Pentecostalism*, ed. by Terry L. Cross and Emerson B. Powery, Lanham, Md.: University Press of America, 2000, pp.40f.
- 58 Cf. Oeming, op. cit. S.112–114.
- 59 Ibid. 日本では浅野、関根、中澤という旧約聖書学の泰斗が揃って、אניני を「私に」と解している。ただ残念なことに、いずれもその根拠を示してはいない。参照、浅野順一『ヨブ記註解Ⅳ』創文社、



1974年、326頁。関根、上掲書、364頁。中澤、上掲書、170頁。

- 60 BW6のPower User Modeでאֱלֹהִיםを検索すると、Full Word ListboxとWord Statistics List boxに「אֱלֹהִים 467」と表示されるが、Results Verse Listboxに明示される総登場回数は、465回に過ぎない。本稿では、その検証を試みるために、登場箇所が明示されている後者の数値を採用する。またこの465回の中には、אֱלֹהִים (12回)、אֱלֹהִי (4回)、אֱלֹהֵי (1回)、אֱלֹהֵי (1回)、אֱלֹהֵי (1回) など、合計19の異なる語が含まれているため、最終的にאֱלֹהִיםの登場回数は446回となる。
- 61 連動する動詞のない場合も8箇所ある。
- 62 この中にはאֱלֹהִים לְאֹמְרֵי רַבְרַבֵּיהֶן וַיְהִי=「主の言葉がわたしに臨んだ」(エレミヤ書1章4節、他) という定型句62回を含む。
- 63 Cf. BDB, p.40., “אֱלֹהִים” 6.
- 64 厳密には意識(例えばホセア書7章14節「わたしの助けを」)や省略(例えば創世記24章40節、他多数)もあるが、BHSに照らして見ると、どれも「私に(対して)」という意味で解釈して不都合がない。また唯一エゼキエル書33章22節(「わたしの上に」)が、אֱלֹהֵי との混同を想定させるが、意味合いとしては向きや方向を指示している点で、問題にならないと理解される。
- 65 Cf. D. Patrick, “Job’ s Address of God,” *Zeitschrift für die alttestamentliche Wissenschaft* , Vol.91 (1979), p.269.
- 66 Cf. BDB, p.465, “כֹּן” , nif.
- 67 BW6の検索結果では、登場回数は221回となる。これは歴代誌下33章16節のכֹּןと同35章4節のכֹּןがケティブである上に、後者はケレも כֹּן を語根とする動詞כִּינִי כֹּןであることに由来する。BW6は、カウント上後者の重複を相殺しているが、本稿では、より多くの出現例を確認することを狙いにこれを相殺していない。このため、この段階でBW6に対して1回多い222回となるが、この中には歴代誌上18章8節 כֹּן (「クン」。地名)、エレミヤ書7章18節 כֹּן (「献げ物の菓子」、同44章19節 כֹּן (「パン」という3つの名詞が含まれているため、これを差し引くと、219回になる。
- 68 新共同訳での訳は、活用の違いまで含めると168種類に及ぶ。頻度の高いのは、順に「準備した」10回、「備え」6回、「固く据え」5回、「固く立つ」「固く据えられ」各4回、「正しく」「備えをせよ」各3回—などである。
- 69 BDB, p.465.
- 70 HALAT, S.442.
- 71 THAT, S.812—817.
- 72 THAT, S.812.
- 73 ThWAT, S.95—107.
- 74 K. Koch. “ כֹּן ” ThWAT, Bd.IV, Stuttgart: W. Kohlhammer , 1973, S.99.
- 75 Ibid.
- 76 参照、和田幹男「聖書ヘブル語のKWNについての一考察」『サビエンチア：英知大学論叢』第8号、英

- 知大学、1974年、49頁。
- 77 Koch, loc. cit. なお現代アラビア語には、כּוּןと同じ語根を持つ語としてكونが存在する。『パスポート初級アラビア語辞典』（白水社、1997年）、310頁によれば、母音も同じ「カウン」は、「存在」、「存在すること」、「…であること」を、また異母音の「カウワナ」は「創造する」、「形成する」を意味する。
- 78 BDB, p.465, “ כּוּן ” Niph.2.
- 79 HALAT, S.443, “ כּוּן ” nif.6.
- 80 ThWAT, Bd.IV, S.101.
- 81 THAT, S.814.
- 82 Budde, loc. cit.
- 83 ハーベル、上掲書（注12）、213頁。ただ後には、the truth（「真理」）と、七十人訳に準じた訳に転じている。Cf. Norman C. Habel, *The Book of Job : a Commentary*, London: SCM Press, 1985, p.575.
- 84 Moore, op. cit., p.41.
- 85 Duck-Woo Nam, *Talking about God: Job 42:7-9 and the Nature of God in the Book of Job*, New York; Peter Lang Pub Inc., 2003, p.24.
- 86 Cf. Gesenius' *Hebrew Grammar*, New York: Oxford University Press, 1995, p.393, § 122 q.
- 87 Ibid., p.295, § 100 d. なおNamは「副詞」説の論証に、この箇所を引用している。Cf. Nam, op. cit., p.29, Notes 48.
- 88 ここでは、エレミヤ書3章5節、列王記上12章7節のケティブ、ケレを重複して計算。
- 89 אֲנֹכִי を伴う構文（200箇所ある）については、今回の計算から除外している。
- 90 今一つの考え方としては、ヤハウエがヨブに対する否定的な語り掛けを行った後の箇所に指示内容を見出すことが挙げられる。だがその際にも、すでに本稿1.5.3で検証済みである42章2～6節の他に、それと思しき候補は見当たらない。
- 91 「たしかなこと」という、「目的語」説の訳を当てる岩波版聖書は、当該部分に、ヨブの「発言そのものが正しく、真実であるというのではない」（171頁、注4）云々という註釈を加え、ヨブの言葉と、「正しく、真実であるもの」とを分離した理解を強調する。しかしこれは、いささか不自然な論理に映る。
- 92 Porter, op. cit., p.303.
- 93 並木浩一はכּוּן־הַ的理解に関連し、「完全にHowの問題だと理解したときには、当該語を訳出する必要がなくなる」（並木浩一『「ヨブ記」論集成』教文館、2003年、238頁、注9）と言うが、本稿では後に、そのニュアンスが持つ重要性を指摘することになる。
- 94 Namは、これまでに見てきたאֲנִי אֶתְּקַן を軸に、ヨブ記42章7節と申命記31章16-22節との間の並行関係を指摘している。Cf. Nam, op. cit., pp.19f.
- 95 Budde, loc. cit.
- 96 Moore, loc. cit.
- 97 Nam, loc. cit.

98 Moore, loc. cit.

99 Ibid.

100 HALAT, S.442.

101 各種の辞書を参照しても、ニファル形に、これに該当する意味合いは見られない。だが *Gesenius' Hebrew Grammar* には、カル形が自動詞か、使用されていない場合のニファル形は、カル形と同じ意味を持つことができるとあり (Cf. *Gesenius' Hebrew Grammar*, p.138, § 51f.)、**ן** は後者に該当する。

102 Cf. Moore, loc. cit.

103 野本真也「神の像としての人間：創世記1章26～27節の研究」『基督教研究』第40巻第2号、同志社大学神学部基督教研究会、1977年、92頁。